

母音變化と音聲哲学の諸問題

千 葉 勉

科学が、分化発展して、相当高度の段階に到達した今日、果して、哲学というものが、必要であるか、どうかということは、重大な問題の一つに違いないであろう。従來の意味に於ける哲学は、今後、科学一般として aufheben (止揚)されるであろうと主張する人々もある。又、一方、これに対して、科学がますます分化すればするほど、一層、哲学は「諸科学の科学」(science of sciences)として、新たなる形態をとつて 発展しなければならぬと力説する人も、少なくない。けれども、左様な大きな問題を検討することは、哲学の専門家におまかせしておいて、こゝでは、私が当面の重要課題として、とくに痛切に感じている音聲哲学を、母音變化という具体的な問題と結びつけて考察したいと思う。

近代音聲学が、いかに、自然科学的基礎に立脚しているとしても、音聲そのものは、あくまでも、人間の音聲である。それは、社会的現実と不可分の関係にある人間の音聲として とりあげられなければならないもので、これを抽象的絶体的存在として思惟することは出来ない。反対に、それは、常に、運動し発展する過程のなかにあるものとして、研究されなければならないと信ずる。

言うまでもなく、近代哲学における発展 (Entwicklung) の概念は、ダーウィニズム的進化 (Evolution) の概念より、もつと高度のものである。キリシヤ哲学者たちは、万物をその生成消滅の過程において、把握しようと務めた。ヘラクレイトスの如きは、自然の運動、変化に対して、近代科学者も驚嘆するような深刻な思惟形式を持つていたように思はれる。この傾向は、アリストテレスの自然ならびに精神⁽¹⁾に関する廣範な研究のなかにも、矢張り、看取することが出来る。

(1) 「アリストテレス」は「ヘラクレイトス」と違い自然のみならず、精神の問題、換言すれば、後世の文化科学に属する言語を精神活動の表現として取扱うというように、そういう意味の精神と自然とを五分五分に取扱つた。

ギリシャ文化の中心が、アテネから アレキサンドリアへ移されてから、即ち近代科学の祖と言はれる所謂「アレキサンドリア科学」の発生以來、科学は迂遠¹⁾な途をたどつて發展して來る中に、いつしか、ギリシャ的思惟形式は喪失されて、形而上学思惟にのみ依存するようになってしまつた。

フランシス・ベーコンは、たしかに、近代科学の哲学的基礎を与えて人として、文化史上、その功績は、高く評賞すべきであると思う。しかしながら、この時以來、科学は、その方法として、もつぱら 帰納法を中心とするような傾向を生み、演繹法は非科学的方法とさえ見做される場合が多かつたことは否定出來ない。分析的であると同時に総合的な帰納法と演繹法との統一としての近代科学の方法は、實に、カント哲学体系に、また具体的にいえば、ヘーゲルの劃期的名著と謳はれる „Wissenschaft der Logik“ によるところが多かつたことは白明である。

然し 斯様に述べても、私は音声学の哲学的基礎を、そのまま、これらドイツ觀念論哲学の大成者たちに、求めよと主張するものではない。

科学は、当然、過去の哲学の成果を、あますところなく取り入れると同時に、哲学の新たなる發展の基礎を与えねばならないと考える。音声学史上、もつとも重要なる学者の一人であるヘルムホルツは、明かに、カント哲学という思想的背景を持つた物理学者であつた。ところが、カントを基礎としたヘルムホルツ²⁾の官覺論は、彼の名著 „Die Lehre von den Tonempfindungen“ (英訳 „Sensations of Tone.”) において、カントのそれよりは、遙かに發展させられたところが見受けられる。

かくして、彼の功績は、やがて、心理学に、また、その後の哲学に大なる影響を与えるようになった。吾々が、ある一定の哲学的世界観をもつて、科学の研究を始めた場合、その研究の結果は、さらに、哲学的世界観を發展させるようになるべきだと考える。

(1) ギリシャ哲学者の殆んど全部が、あらゆる実在を發展過程の中に觀察したが、中世時代になると、余りめざましい進歩を見せなかつた。

(2) ヘルムホルツはカントから官覺論を學んだが、この問題については、のち、カント以上の研究を遂げ、引いて哲学に大なる貢獻をいたすに至つた。カント自身は認識論を唱ふるに當り、官覺論にはあまり重点を置かなかつたように思はれる。

嘗つて、私は音声美学を研究し始めた当時、單音のそれぞれの音韻美を科学的に追求しようと務めたことがあつた。ところが、一向に、満足な結論を得ることが出来なかつた。それは而然である。当時の私の美学に関する知識は、形而上学的思惟を基礎としたものであつて、「美の相対性」ということを、充分に理解していなかつたのである。であるから、いたづらに、單音、例えば K-phoneme だけを抽出して、その音感美を解明しようとしたために、結局、K は不快な音だといつた、極めて通俗的な結論にしか到達し得なかつたのである。そこで、私はこうした探究を、しばらく、抛棄して、一般美学・一般心理学の研究書に、一通眼を通すことに決心した。これは、非常に労力のいる而も極めて迂遠な途を辿るように思はれたが、実は非常な効果を与えて呉れたのである。知情意を機械的に分離させることなく、その統一として研究する近代心理学、及び美を抽象的絶体性⁽¹⁾においてでなく、現実的相対性のうちに、把握しようとする近代美学は、ついに、私に、音声美学の一應の解決を可能ならしめたばかりではなく、さらに、音声美学の立場から、一般美学や一般心理学の不充分な点にも、若干氣がつくようにさせて呉れた。

かうした種類のことは、読者諸君には、度々、経験があることと思う。けれども私はこの時以來、幾多の諸科学は弁証法的交互作用のうちに發展せしめるべきものということ、一層痛感するに至つた。就中、音声学は、言語学、物理学、心理学、生理学などの基礎科学から生れ出た科学であるだけに、これらの科学の成果を充分に取り入れて、しかも、それと統一するためには、どうしても音声に対する哲学的裏付けといつたようなものが必要だと考えようになつた。今試みに、「日本語アクセント」の問題をとりあげ、これを上述の観点から述べて見よう。問題の中心となつていところは、日本語に、固定した語アクセントがあるかないかという問題に帰着すると考えるが、日本語アクセントは固定せず流動的だ という説は余り有力ではないように思はれる。結局、日本語には固定した「アクセント」があるが、これが流動し変化し得る傾向を持つところ、一般の意見が落着いているのでないだろうか。けれども、私

(1) 赤色は一般に奇麗な色だと思はれているが、場合により反対の効果を生むことがある。例えば鼻の頭に赤色をつければ、却つて醜惡な感じを起させる。

はこれだけの説明でも不十分だと考える。日本語の語アクセントの問題は、そのまま、哲学上の本質 (Wesen) 論と現象論 (Erscheinung) とを追求することによつて、その根本問題を解決すべきだと思う。言うまでもなく、哲学で論じられる本質と現象との問題は、科学の基礎理論を構成しているにも拘はらず、これが音声学にとり入れられていないのは、音声学における哲学の貧困を物語るといえるであろう。つまり、日本語においては、語アクセントは、本質において固定しているが、現象形態においては可動的であるから、問題はむしろ固定性⁽¹⁾の内容と可動性⁽²⁾の原理にあるのではないかと考える。

ところが、これらを本当に解決するためには、音声学は、さらに、科学として体系づけられなければならない。リズムの問題などになると、殆ど未開拓の状態で、寧ろ直接にサンタヤナのような哲学者の思索の結果を借用しなければならぬ状態である。

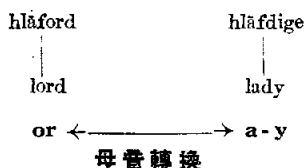
私は、かねてから、グリムの法則をとりあげて、音声学の立場から、これを再検討し、子音変化ならびに音変化の現象の本質を追求してみたいと考えていた。勿論、私はグリム⁽³⁾の偉大なる功績を否定するものでもなく、また、彼と対立的見解に立つて、新しい法則を発見したという訳ではない。反対に、グリムに暗示を得て、その成果を音声学に取り入れることによつて、音声学の昂扬発展をはかり、また、そうすることによつて、出来れば、グリムの法則そのものをも、更に正しい軌道に沿つて発展させたいと思うに過ぎないのである。ところが、現在に於ては、子音性の物理学的説明が完成されていないから、子音変化については、決定的な意見は、しばらく、差し控えることにし、茲では、母音変化だけを取り上げて見ることにする。およそ、言語に起る母音変化の現象は、言語の発展過程において、必然的に随伴することはいうまでもない。この現象は多種多様の形をとつているが、音声学の観点からすれば、その最も本質的なものは、結局、二つに帰するであろう。その一つは、或る語の対立語又は対

(1) 同じ音節数の語が、その由来、種別等によつて如何なる固定性を持つか。

(2) 語と語が連結した場合、夫々の語の固有のアクセントが如何なる法則によつて変するか。

(3) グリムは母音よりも寧ろ子音の方に重きを置いているが、音韻変化の根本原則に於ては、両者の間に甚だしい差異はないと思う。

照語などを形成するために起るところの母音変化である。私はこれを「母音轉換」と呼ぶことにしている。いま一つは、ある語の發展過程に於いて、それ自体の形態変化として起る母音変化である。これを私は「母音変移」と呼んでいる。然し、これだけでの説明では抽象的に過ぎるから、少しく具体的な例をとつて解説を試みて見よう。よく言語学で引用される英語の lord と lady に就いて見るに、lord は古代英語の hlāford⁽¹⁾ 即ち hlāf weard = loaf-ward (パンの管理者) を語源し、lady は同じく古代英語の hlāf-dige = loaf-kneader (パンをこねる人) を語源としている。勿論こうした語の歴史の変遷を説明することは、言語学の範囲に属することであるが、音声学に於いては、lord という男性名詞と lady という女性名詞が音韻的対立をなしているということが問題となつて来る。即ちこの場合、l と d という子音が二語に共通して存在する以上 当然、母音が対立的語感を構成する要素となる訳で、これが音声学上の母音轉換である。試みに、これを図解すれば下の如くなる。



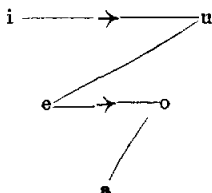
そこで、音声学の立場からすると、二つの語の母音の要素が対立的語感を起させるのは何故か ということが 第一に問題になつて来る。この問題が解決された時吾々は、再び、言語学で取扱はれる歴史の変遷に立ち帰つて、hlāford が lord に發展する場合、又 hlāf-dige が lady に發展する場合の夫々の母音変移の現象を考察するのである。勿論 この場合には、子音変化も含めて考えなければならないが、古代英語から現代英語への發展の特質から見ても、hlāford

(1) hlāford が lord になり、hlāfdige が lady となるのは母音変移である。然し、音声学的見地よりすれば、lord と lady とは母音轉換によつて生れた対立語といえるであろう。グリムは單獨語としての母音変移という歴史の変遷のみを考えたようだ。この点甚だ遺憾に思はれるが、要するに、彼は Darwinism 的な進化論の立場から言語を見た丈で、母音変移と母音轉換とが並行して起す複雑な変化現象を解明しなかつたのである。換言すれば、母音変移と母音轉換とが同時に発生して、交互作用を起しながら現代語の lord, lady となるに至つたことに氣附なかつたのである。

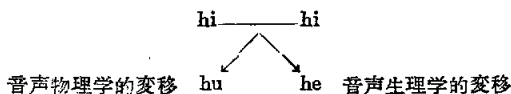
が必ずしも lord 以外の形に変わることはないとは言はれない。同様に hlāf-dige も lady 以外の形に変わることがないとは言はれない。然し、現実的にこれ等の二語が夫々 lord, lady という形に変わったのは何故であろうか。こゝでわれわれは再び母音轉換を考えなければならない。かくして、hlāford と hlāf-dige とは夫々対立的な内容を表現し得るように、即ち、男性と女性という対立的語感を与え得るように、歴史的発展として来たことが了解される。換言すれば、lord と lady とは夫々 hlāford と hlāf-dige との「母音轉換と母音変移との統一としての変化」によつて出来た語だということが分るのである。以上述べた所は可成り複雑であるが、その要点は理解出来ると思う。斯くして音声学は言語学的に適用されて、自らを深めると同時に、言語学をも発展させることが来るのではないかと考える。

次に、日本語の數詞を例にとつて見るに、日本語の數詞は、本來倍数を基礎として発達した言葉のように思はれる。つまり hito (1) の倍数として huta (2) mitsu の倍数として mutsu (6), yotsu (4) の倍数として yatsu (8), itsu (5) の倍数として itodo (10) というように発展して来た。今、hito (1) と huta (2) について考察するに、h と t の子音は両方に共通している。また、hito の to と huta の ta は語根としては考えられないから、結局、hi と hu を比較すれば充分であろう。そうすれば、当然、i と u との対立によつて倍数の語感をつくる要素が構成されることになる。従つて、音声学の立場からは、i と u との対立感の客観的性質を検討しなければならない。ところが、i は拙著「母音の研究」で詳しく述べておいたように、二重フォルマント母音 (double formant vowel) であり、u は単一フォルマント母音 (single formant vowel) である。しかも、i は五母音中、最高の formant を持ち、後者は最低の formant を持っている。又発音の生理学的物理学的機構から見ても、i の場合の声腔は single resonator (単一共鳴域) となり、u の場合は double resonator (二重共鳴域) となる。従つて、これ等二母音の客観的対立的特質は、必然的に、主観的対立特質を生み出すことになる。斯様な次第で、音声学は hi と hu との倍数的差別を科学的に立証することが出来る。そこで、言語学の歴史変遷を考えると、hu (2) は hi を二つ重ねたところの hi-hi から発展したという法論に到達することか出

来る。そこで、我々は再び音声学に立ち歸つて、hi-hi が hu に変るところの母音変移を考えて見る。実験音声学でやる phonographic method という方法をかりて、レコードの回轉速度を増⁽¹⁾した場合の母音変化は、つぎのようになる。



こゝに於て、hi-hi が hu に変移することが、音声物理的に立証されることになる。けれども、音声生理学の立場から、hi-hi が he に変りうる場合も考え得る。しかしながら、hi と he では、倍数的語感が出て來ないから、結局、hi は hu へと母音轉換すると同時に母音変移をすることになる。これと同じ現象が、英語の goose (u) と geese (i); foot (u) と feet (i) などの場合にも認められる。



以上の例は母音変化の中で最も簡単で、しかも、最も解り易いものであるがこれによつて、我々は、單に変化というものの中にも、実際には、極めて複雑な現象があることを発見するのである。

これは、獨り母音変化の場合に限らない。子音變化の時などは、到底、單なる記述だけでは説明し得ないほど複雑を極めたものとなる。しかし、母音変化によつて得られた変化の概念は、子音變化の場合に、演繹的に適用され、又複雑は事實を知ることによつて、帰納的に變化の概念を深めることが出来る。こうした概念を深めるためには、成長の途上にある若い音声学は哲学的方法を以て武装することが、ますます必要となつて來ると信ずる。

(1) record の回轉速度を早めると、pitch と formant が高くなるが、大人の場合二倍以上に速度を高めると、^{アイウエオ} | | | | のようになりア文が不変がイが結局消える。小児の場合には 1.3 倍位に速度を早めれば同じ結果を生ずる。